

イチゴうどんこ病の育苗期での発生が本圃の発病に及ぼす影響							
<p>【要約】 育苗期における<u>うどんこ病</u>の発生は7月中下旬にピークとなり、以後は夏期の高温により抑制される。しかし、冷夏等により抑制が低い場合には感染源が残り、本圃での発病が増加する。また、<u>低温暗黒処理育苗</u>では高温による発病抑制が不十分で、感染源が残りやすく、このことが本圃での本病の多発を招いている。</p>							
生産環境研究所・病害虫部・野菜花き病害虫研究室					連絡先	092-924-2938	
部会名	園芸	専門	作物病害	対象	果菜類	分類	指導

〔背景・ねらい〕

いちごの本県ブランド品種‘とよのか’は、うどんこ病に対する耐病性が弱い。また、低温処理育苗等の新しい栽培技術の導入も相まって、うどんこ病は従来と異なった発生様相を呈するとともに、その発生面積も増加の傾向にある。このため、薬剤防除回数が増加し、薬剤耐性菌の発生も危惧されている。そこで、できるだけ薬剤防除に依存しない防除体系を確立するため、育苗方法の違いによるうどんこ病の発生病消長並びに本圃での発病との関係を検討し、本病の多発要因を解明する。

〔成果の内容・特徴〕

- ①うどんこ病は育苗期の7月中下旬にかけて展開葉の上位1～2葉に感染、発病するが（表1）、以後は高温によって発病が抑制され、停滞する（表1）。
- ②7月が低温に経過すると低率ながら発病が続くため、本圃定植時における発病葉率の増加、すなわち感染源の増加につながり、多発要因となる（データ略）。
- ③低温暗黒処理育苗では、8月中旬から定植まで苗が低温条件下に置かれるため、高温による発病抑制期間が極端に短くなる。このため、感染葉あるいは発病葉が本圃に持ち込まれることが多く、このことが多発要因となっている（表2）。

〔成果の活用面・留意点〕

本病は上位1～2枚目の展開葉に感染、発病するので、これらの葉位を観察することにより病勢の進展状況を把握できる。また、低温暗黒処理育苗では、本圃に持ち込まれる感染源が多くなるので、入庫時までの防除を徹底する。

[具体的データ]

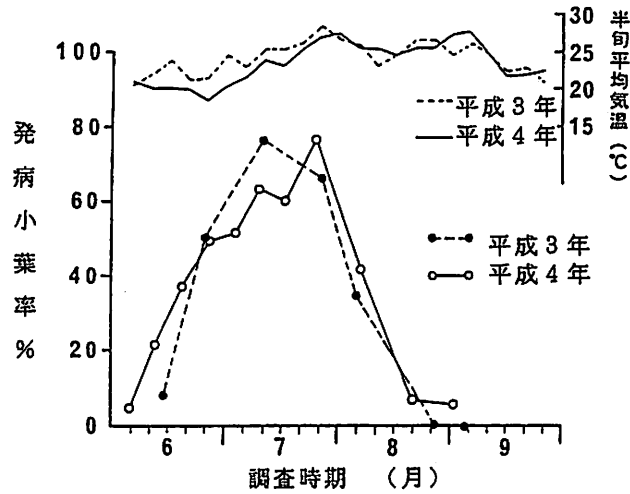


図1 育苗期におけるうどんこ病の発病消長（上位3複葉）

表1 育苗期におけるうどんこ病の葉位別の発病消長（平成4年）

葉位	発病小葉率 (%)							
	6/5	6/12	6/26	7/9	7/24	8/6	8/20	9/1
最上位展開葉	2.2	31.1	81.0	81.1	51.1	0	0	0
第2葉	6.9	12.2	44.3	77.6	100	35.2	1.1	0
第3葉	0	0	21.0	30.3	80.5	96.4	16.8	16.7
第4葉	0	0	0	7.3	61.4	90.5	82.3	6.8
第5葉	0	0	0	0	23.0	85.8	95.1	51.7

表2 育苗方法(花芽分化促進法)の違いと本圃での発病（平成3年）

育苗方法		育苗期				本圃		
		7/26	8/5	8/26	9/18	10/5	10/18	11/8
無処理 (露地)	発病株率(%)	100	100	0	0	0	0	0
	発病小葉率(%)	66.3	35.0	0	0	0	0	0
低温暗黒 処理	発病株率(%)	100	100	-	-	0	15.0	20.0
	発病小葉率(%)	66.3	35.0	-	-	0	3.9	7.8

注) ①発病は展開葉上位3複葉の調査による。低温暗黒処理は8/23～9/12。定植9/18。

[その他]

研究課題名：イチゴ多発病害の総合制御技術調査、解析

予算区分：国庫（植物防疫）

研究期間：平成4年度（平成2～4年）

研究担当者：池田弘、大野和朗

発表論文等：平成4年度生産環境研究所病害虫部野菜花き病害虫関係試験成績  
概要書